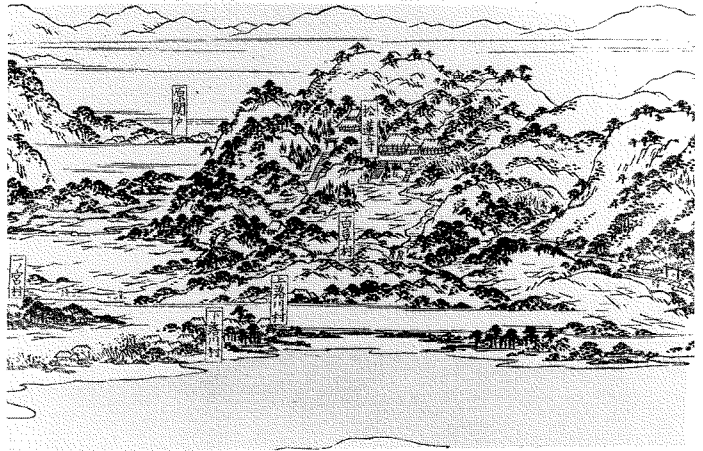
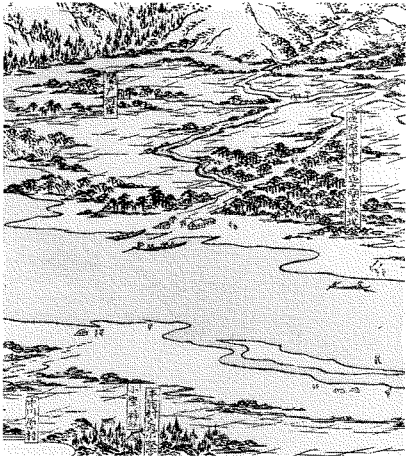


あるむぜお

府中市郷土の森だより

No.37

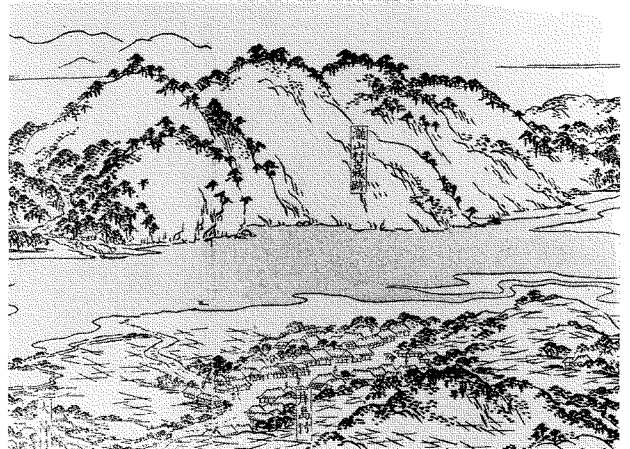
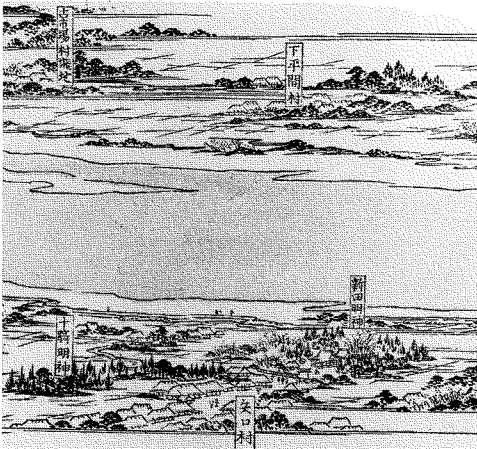
al museo



多摩川の風景5 合戦の記憶

『調布玉川絵図』（本館蔵）で見渡す悠々たる多摩川の流れは、中世の歴史の興亡をも映し出しています。中流の渡船場近くで見つけた「從此府中宿之之間古戦場」の説明（左上）は、有名な分倍河原古戦場（現・府中市）のこと。新田義貞の鎌倉攻めを始め、いく度となく重要な合戦が繰り広げられました。ここを見下ろす丘の上には松蓮寺（右上）。かつては、真慈悲寺という鎌倉

幕府と関わりの深い寺があり、幕府の北の防衛戦の役割を果たしていたようです。下流の新田神社（現・大田区）は、続く南北朝動乱の時代に謀殺された新田義興の霊を祀っています。その従者を祀った十騎神社も隣に（左下）。上流は秋川との合流点の近くには、戦国の世に関東を制覇した後北条氏の拠城・滝山城の址（現・八王子市、右下）。武田信玄の攻撃をかわした歴史を今も誇らしげに多摩川を見下ろしています。（〇）



【展覧会案内】

江戸の粹 — 柄鏡

9月21日(土)～10月27日(日)

かがみは、光の反射の原理を利用して姿形を映し見る道具です。今でこそ鏡はガラス製ですが、これが普及したのは近代になってからのことで、それ以前は鋳銅製の鏡が一般的でした。これは銅板の表面を研磨して姿形を映すようにしたもので、その背面には様々な文様が描かれていました。

こうした銅製の鏡の登場は弥生時代にさかのぼり、当初は大陸からの舶載品に限られていましたが、はやくも弥生時代の末にはそれを模倣した鏡の生産が開始され、やがて平安時代には我が国固有の文様様式を持ったいわゆる“和鏡”が成立します。しかし、鏡の形は円形が基本で、人々は鏡に強い神秘性を感じ、実用的な化粧道具としては認識されていませんでした。

化粧道具としての鏡が確立するのは、柄の付いた鏡—柄鏡—が登場してからのことです。我が国での柄鏡の生産は、室町時代の後期頃のことで、それは中国製の柄鏡の輸入が契機となったと考えられています。しだいに柄鏡は従来の円鏡にとって替わり、実用的な化粧道具として人々の生活に浸透していき、江戸時代には一般の人々の間にまで広く普

及しました。

このように柄鏡は実用の化粧道具として普及したにもかかわらず、その背面には、それ以前よりも自由闊達でさまざまな文様や図柄が描き込まれています。動植物や風景・器物そして家紋などなど。物語や謡曲を題材としたものや奇抜なデザインも少なくありません。なかには専門の絵師が下絵を担当したと思える作品もあります。そこには実用性のみを求めたのでは飽き足らなかった、江戸時代の人々の心意気を看取することができます。

円形のキャンバスに描かれた“粹”な世界とってよいでしょう。

特別出品

大国魂神社の古鏡

あわせて、市内大国魂神社に伝来する古鏡を展示します。御神鏡をはじめ、くらやみ祭に際して御輿に吊り下げられた和鏡など、非日常的な世界の鏡です。

(F)



講座 地域から見る 教育史 その2

—教科書資料の視点—

教科書の年代順・科目別のサンプルを集めるのではなく、地域の子供たちの手垢にまみれた教科書を収集していきたい。それによって、当時の学校生活の生彩な様子を復元できたら…。そんな意味のことを前回少しお話ししました。

郷土の森博物館で所蔵しているたくさんの教科書類の多くは、表紙が傷み、ページが折れ曲がり、署名や落書が書き込まれていたりします。こうした教科書の“使われ方”に関する情報も今後は検討していく必要があると思います。今回はその一例として“教科書に偶然挟み込んであった紙片”を取り上げてみます。

—教科書の中の紙切れ—

ある時、必要があつて、あるいは他に場所がなく、紙切れを教科書に挟んでおいて、そのままになってしまう。そんなことは今も昔もよくあることです。当館所蔵の教科書資料の再整理を進めていく過程で、教科書の間から見つかるものが意外に多いことに気が付きました。学校からの配布物や答案用紙、手製の葉やメモ書きなどがありますが、そのうちラブレターの下書きだつて出てくるかもわかりません。

以下に紹介していくのは、下染屋村(現・府中市白糸台)のT家の兄弟姉妹の方たちが、戦前・戦中にかけて使用した教科書の間から見つかった資料です。その教科書が開かれていた教室の雰囲気を生々しく伝えてくれます。

—やがて、学校にも戦争が—

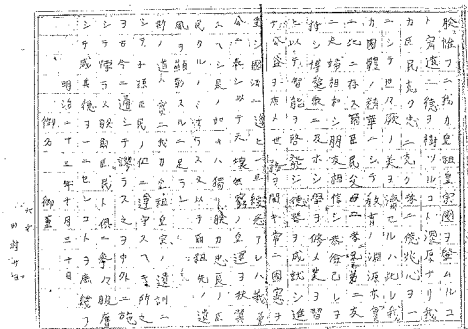
裏表紙に、6年生の女の子の署名がしてある国定教科書『尋常小学読本』巻12は、奥付によれば、大正15年6月の発行。この本の間には、同じ年の12月に亡くなった大正天皇を悼む歌の歌詞カードが挟まっていました。「記者も、哀しみの涙にかきくねながら、先生にお願ひして、この奉悼歌を差し上げます。どうぞ、しっかり練習して下さい」と書かれ、また『少年倶楽部』などの宣伝も載せられているように、雑誌社が

学校を通じて子供たちに配つたものでしょう。

それから十数年、弟や妹たちは、遠足で大正天皇の多摩御陵に出かけています。昭和14年9月発行の『小学国語読本』巻11には、「春季校外教授」の葉が挟んであつたのです。初等科5、6年生が対象で、5月7日に電車・バス・ケーブルカーを使い多摩御陵と高尾山へ。費用は85銭なり。高尾山(八王子市)は、地域の古くからの信仰の山で、手近なハイキング・遠足・参拝などで、今日も人気の場所です。



昭和11年3月発行の『小学作法書』第6学年からは、教育勅語を子供が全文筆写した紙が出てきました。横には赤ペンで丸がしてあります。子供の頃、意味もわからないまま暗唱させられたという話によく耳にします。



さて、こうした間にも、昭和12年には日中戦争が始まり、16年にはアメリカとの戦争も開始します。この年、尋常高等小学校は国民学校と名を変え、より徹底した戦争のための教育がされるようになります。その「国民学校の時代」については、次回に今回同様“教科書の中の紙切れ”を頼りに見ていきたいと思ひます。(〇)

百武彗星そしてヘール・ボップ彗星

本間 隆幸

今年の3月に明るさを増し、新聞やTVなどでも話題になった百武彗星の事を覚えているでしょうか。今まで彗星と言えばハレー彗星しか知らなかった人も、この珍しい名前に魅せられ、百武彗星には随分注目していたようです。

一体、彗星とはどのような天体なのでしょう。当館のスタッフが数日に渡り、百武彗星を追いかけた時のエピソードと共に紹介していくことにします。

★彗星ってどんな星？

彗星はいくつかの部分に分けることができます。汚れた雪玉とも言われる彗星本体を核（地上の観測では直接その姿は見えません）と呼び、その周りに直径100万kmにもおよぶ、おぼろげに広がって見える部分を「コマ」とよびます。ここから伸びている尾は2種類あります。太陽とほぼ反対方向に伸びる尾を「イオンの尾」、
「プラズマの尾」、あるいは「タイプI」といい、塵が彗星の軌道にほぼ平行して、太陽光を反射して輝いて見える尾を「ダストの尾」、あるいは「タイプII」と称しています。

さて、彗星はどのように宇宙を放浪しているのでしょうか。彗星を幾晩かに渡り観測するとその軌道を求めることができます。この軌道は下記6つの要素からなり、これらが確定すると彗星の通り道が判明します。

近日点通過時刻 T : 彗星が太陽に一番近づく日
近日点距離 q : 彗星が太陽に一番近づいた距離
離心率 e : 軌道が円、楕円、双曲線のいずれかを示すもの
軌道傾斜角 i : 地球の軌道（黄道面）に対する傾き
昇交点黄経 Ω : 黄道面を南から北へ横切る点を春分点から測った角度
近日点引数 ω : 黄道面に対する軌道の向きを決定するもの

彗星は、この軌道によって、周囲が何千年といった楕円軌道を持つ長周期彗星と、200年以内の周期を持つ短周期彗星（かつては長周期彗星だったものが惑星の重力の影響などで軌道を変えられたもの）に大別されます。

太陽系の他の天体と大きく異なる点は、太陽からかなり離れた場所からやってきて、太陽に近づくにつれ、その姿形を変化させるところにあります。このため、突然現われては消えていくようにも見え、昔の人が彗星を大変恐れていた所以です。今回の百武彗星も例にもれず、数日で大変化をとげました。

★百武彗星

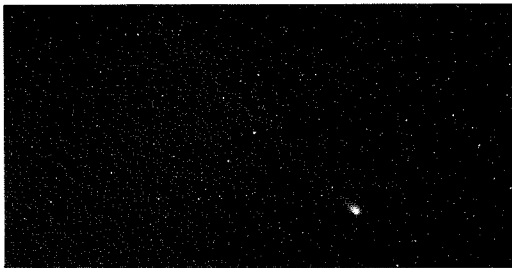
1996年1月31日、鹿児島県在住の彗星探索家・百武祐司氏により彗星状天体が発見されました。百武氏はその日、前年12月に自ら発見した百武彗星(1995 Y1)の撮影を行った際、彗星を発見した位置のすぐ側にもう一つ、同様の天体を確認したのです。その後の観測から新彗星と断定され、これも百武彗星(1996 B2)と命名されました。これ程の短期間に2つも新彗星を発見することは、極めて稀な出来事です。やがてこの新彗星は太陽-地球間の10分の1の距離まで地球に接近することが発表され、天文学者及びアマチュア天文家たちは、大急ぎで観測の準備を始めました。

郷土の森でも、可能な限り百武彗星をビデオや写真に納めることにしました。問題は、この彗星が地球に最接近する頃に、どのような姿を見せるのかが、予想不可能なことにありました。過去にも地球に接近した彗星で、アイラス・荒貴・オルコックといったものは、まるで人魂のようにばやけた姿で夜空を駆け抜け、とても尾を引く雄大なイメージとは似つかわしくないのでした。今回も期待はずれに終わるかも知れぬ危機感を抱きつつ、2月末から3月中頃まで深夜のビデオ撮影を続けました。肉眼で最初に確認したのは3月16日の早朝でした。東京にしてはとても空気の澄んだ、4等星クラスまでの星なら見つけれられる程の条件が幸いしたようです。

その後の天候には恵まれず、ついに22日、郷

土の森の天文指導員2名を伴って、八ヶ岳方面に出掛けることにしました。東京でも予想以上によく見えたことから、さぞかし山では鮮明に映るものと、期待を胸に車を西へ走らせました。果たして期待以上の収穫が待っていたのです。肉眼でもはっきりとわかる程、イオンの尾(20°程度)が鮮明、かつ雄大な彗星が夜空に輝いていました。これ程立派な彗星は見たことがなかったので、思わず息を呑んでしまいました。しばらく肉眼で観測した後、はやる気持ちを落ち着かせながら、無事数カットの写真撮影を終え、永遠にこの場所で彗星を眺めていたい欲望を押しさえつけながら帰路につきました。いてもたってもいられずに、結局翌日も八ヶ岳を目指していました。

25日、最接近の夜がいよいよやってきました。三たび八ヶ岳へと向かった我々に、この彗星は驚くべき姿を示してくれたのです。それは何と、こぐま座からりゅう座、おおぐま座の北斗七星、さらにはりょうけん座、かみのけ座、おとめ座に延々と尾が連なる雄姿でした。二度とこんな姿を目のあたりにすることはないだろうと感激しつつ、何枚も写真のシャッターを切りました。ビデオには、薄いイオンの尾を全て撮影することができませんでしたが、写真でははっきりと捕えることに成功しました。



筆者撮影：最接近時の百武彗星

その後、郷土の森では百武彗星の臨時観望会を実施しました。我々の感動を一般の人たちにも味わってもらいたかったからです。春の不安定な天気による妨害もありましたが、ついに29日には、その姿を確認することができました。撮り貯めてあったビデオ映像もフル活用されたことはいうまでもありません。

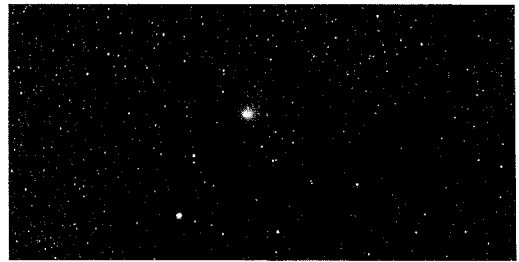
さらに4月中旬に及ぶまで、この彗星の記録

を試みましたが、薄明との戦いであまり良い成果を得ることができませんでした。……この頃になって、脳裏には別の彗星が輝き出しました。

★明るくなるか？ ヘール・ボップ彗星

その彗星は、現在も順調に明るくなりながら太陽に接近し、来年の春には最大一2等級までになると予想される、次なる観測ターゲット、ヘール・ボップ彗星です。

1995年7月23日、アメリカのアマチュア天文学家・ヘール氏とボップ氏によって、いて座の球状星団M70の側に約11等級の彗星状天体が、ほぼ同時期に発見されました。この天体は、移動していること、数夜の観測から計算された軌道が過去の天体のどれとも一致しないことから、新彗星として認められ、両発見者の名前を取りヘール・ボップ彗星(1995 O1)と命名されました。



撮影：吉村昌晃氏(府中天文同好会) ヘール・ボップ彗星

この彗星は、天文学者を驚嘆させるほどの大きさであることが予想されました。発見当時、木星の軌道より遠い距離(地球から約10億km)に位置していたにもかかわらず、11等級の明るさを持っていたからです。百武彗星が発見当時、約2億7千万kmの距離で10等級の輝きだったことを考えると、いかにこの彗星が巨大なものが想像できるでしょう。疑り深い天文学者の中には異論を唱えた人もいたようですが、現在では、まぎれもなく超大型の彗星にちがいないことが判明しています。

この彗星が一番明るくなる来春に向けて、百武彗星の感動を再びと、ウォッチャーたちは手ぐすねを引いて待っていることでしょう。今の内に自分なりの観測計画をたてて、千載一遇のチャンスを最大限に活かす準備をしておきたいと思います。

カメラ アングルの

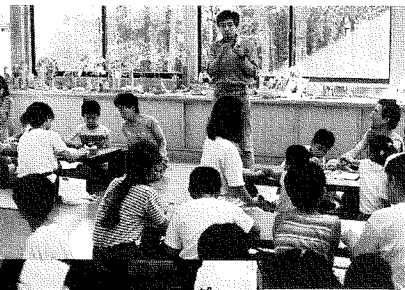
夏休み親子工作教室
8月9日～11日



水鉄砲、竹笛、折紙の朝顔など、それぞれの先生が親切に指導してくれました。夏休みの宿題はこれでOK！

夏休み親子自然講座
7月27日・8月24日

カブトムシの標本づくりは大盛況！参加親子にとってはこの夏のハイライト。



特別展
「銀河鉄道の夜」
7月20日～
9月1日

宮沢賢治生誕100年を記念して、8人の絵本作家による作品を展示しました。それぞれの思いを胸に、作品に向けられる表情も十人十色といったところでしょうか……



郷土の森
夕涼み
八月九日～十一日

今年の夕涼みも盛り沢山の内容でした。コンサートに大道芸と、出演者も大張り切り。



ムダ堀伝承のある大溝

最近の発掘調査から

東京競馬場单身舎宅地区

中山真治

幅15m以上、深さ5mにも及ぶ大溝。これはもう、府中市内で発見された溝のなかでは最大規模です。清水が丘2丁目の東京競馬場单身舎宅地区の発掘調査で、奈良・平安時代の竪穴住居跡を壊して、南北方向に走るように発見された大溝です。

この溝（堀）跡は、江戸時代の享保・元文年間（1716—1741）に描かれたと推定されるこの地域の絵図にもはっきりとその形が記されています。ちょうど府中崖線のハケ下にある滝神社のあたりから北に向かい、清水が丘の谷の北側に回り込み、谷に平行して東向きに大きく蛇行するように描かれています。絵図では「新堀」と書き表されていますが、地目は畑や荒地となっていて、その当時にはすでに使われなくなって埋め戻されていたようです。また明治15年に測量された地形図一土地迅速図一にもその痕跡が残っていて、完全には埋まりきっていなかった様子が窺えます。溝の延びる多磨霊園駅の南側では、ごく近年まで窪地となっ

ていたそうです。総延長1kmにもなるこの大きな溝は、いったい、いつ、何のためにここに掘られたのでしょうか。

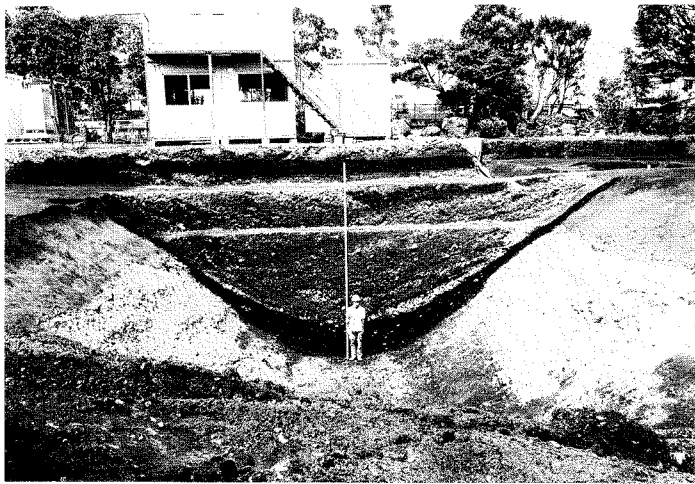
発掘調査の所見では、この大溝がほぼ埋まった頃、溝の一部を壊すように18世紀中頃の土坑墓（土葬の墓）が造られているので、それ以前に掘られたことは間違いありませんが、溝の底の方からは時代を特定できる遺物が全く出土しないことから、掘られた時期を推定することは難しい状況にあります。

ところで、今回発見された大溝のことを地元ではかつて「ムダボリ」「オツボリ」と呼んでいました。ムダは無駄で、掘られたのが無駄になったことを意味していて、「玉

川上水の失敗の跡」という伝承を持っているのです。享和3年（1803）に書かれた『玉川上水起元』という報告書のなかに、承応2年（1653）に竣工した玉川上水は、最初は今の羽村からではなく、多摩川の水を青柳村（国立市）から府中用水を利用して引き入れ、府中の八幡下（清水が丘）付近から台地の方へ掘り曲げようとしたが、水が地中深く浸透して流れずに断念した、次に福生の熊川あたりで再度掘り始めたがこれも失敗に終わり、3回目にやっと羽村から開削して完成した、という意のことが記されています。この文書は、玉川上水ができてから150年ほど後に書かれたものであるため、その信憑性が疑われていますが、だからといって即否定する根拠もありません。今回発見された大溝は、その大きさにおいて他にこれを凌ぐ例はなく、一村の用水に應用される規模でないことも容易に察しが付きます。確かに、大溝の底面には、多量の水が流れた痕跡はありませんでした。しかし、このような形の溝は、中世に遡る、規模の大きな土地の区画溝＝「境堀」に類似したものが見られ、一定の領域を区画した溝＝堀である可能性も否定できません。ここで早急に、溝そのものの性格や時代性を結論付けるのは差し控えておきたいと思

います。

てから150年ほど後に書かれたものであるため、その信憑性が疑われていますが、だからといって即否定する根拠もありません。今回発見された大溝は、その大きさにおいて他にこれを凌ぐ例はなく、一村の用水に應用される規模でないことも容易に察しが付きます。確かに、大溝の底面には、多量の水が流れた痕跡はありませんでした。しかし、このような形の溝は、中世に遡る、規模の大きな土地の区画溝＝「境堀」に類似したものが見られ、一定の領域を区画した溝＝堀である可能性も否定できません。ここで早急に、溝そのものの性格や時代性を結論付けるのは差し控えておきたいと思



あれこれ

カワラノギクの話

今回は植物の話。多摩川保全のシンボルとなっている野菊を紹介しましょう。カワラノギクって御存じですか？ その名のとおり河原野菊のことですが、どこの河原にも生えているわけではありません。関東地方と東海地方の一部の河川にだけ生育しており、初めて発見された場所は、立川市の多摩川河川敷といわれています。学名は アスター カントエンシス *Aster kantoensis* 関東の野菊という意味です。草丈は50cmほどで、11月頃になると直径3.5~4cmの頭花をつけます(キク科の植物で花と呼ばれるのは、花の集まっている部分で、これを頭花といいます)。花の色は白、またはピンクで、数万株がまとまって咲くこともあり、花の少ない季節にあって非常に目立つ存在になっています。

さてこのカワラノギク、多摩川で発見された植物ゆえ、多摩川の植物を愛する人々からは特に大切にされてきましたが、絶滅の可能性が増大している危急種として位置づけられているのです。

カワラノギクは、年末から1月にかけて種子を散布し、3~5月には発芽します。次に、多数の葉が放射状にぴったりと地面に広がるロゼット葉の形を経て、翌年から茎を伸ばして11月頃に花をつけます。そして年末頃には種子が実り、その個体は枯死するという一生を送ります。つまり一回繁殖型の多年草シユというわけです。このタイプの植物には、その種の維持に関して土の中に残っている種子が重要な役割を果たしているものと、ロゼットの集団が重要なものがあります。カワラノギクの種子は、春になるとどこでも発芽してしまう性質を持っているので、土の中に種子が残りません。大型の株が枯れてしまった場合には、小さなロゼットが種の維持に重要な役割を果たすタイプなのです。カワラノギクが生息する河川敷では、洪

水の際にロゼットが全滅する危険性ははらんでいます。ロゼットが全滅すると、土の中に種子を残していないわけですから、カワラノギクは絶滅してしまいます。従って、カワラノギクは非常に不安定な環境に生活していることとなります。

昭和20年代には、多摩川で最も普通に見られる植物であったカワラノギクは、序々にその占有面積を減少させています。増水により丈の低いロゼットが砂礫に埋まってしまえば、その個体は死亡してしまいますが、反面、増水により植物の生えていない裸地が新たに形成されれば、カワラノギクはそこに再生します。ただし、これとて土の中に種子が残っていないのですから、種子を供給してくれる別の個体が近くに生育していなければ不可能となります。多摩川では、小河内ダムの建設や、護岸の整備などにより、河原の地形に変化が起りこりにくくなっているので、増水しても裸地がでにくくなっています。

河川の周辺にも住宅が密集している今日の現状を考えると、河川改修もいたしかたのない所でしょう。しかし、直接人間生活に影響のない堤防の内側においては、川の動きを復活させるような河川管理が可能だと思います。オープンスペースと

としてのグランド、公園などの乱立は、カワラノギクのような植物にとってはマイナス要因の一つなのです。河川敷を自然に帰すことは、多摩川の自然が回復する第一歩につながり、カワラノギクを始めとする河原の植物を保全するための研究がその足掛かりとなるのです。(N)



あるむせお 第37号

al museo イタリア語
"博物館で" "博物館にて" の意
発行日 1996年9月20日
発行 (財)府中文化振興財団
府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921